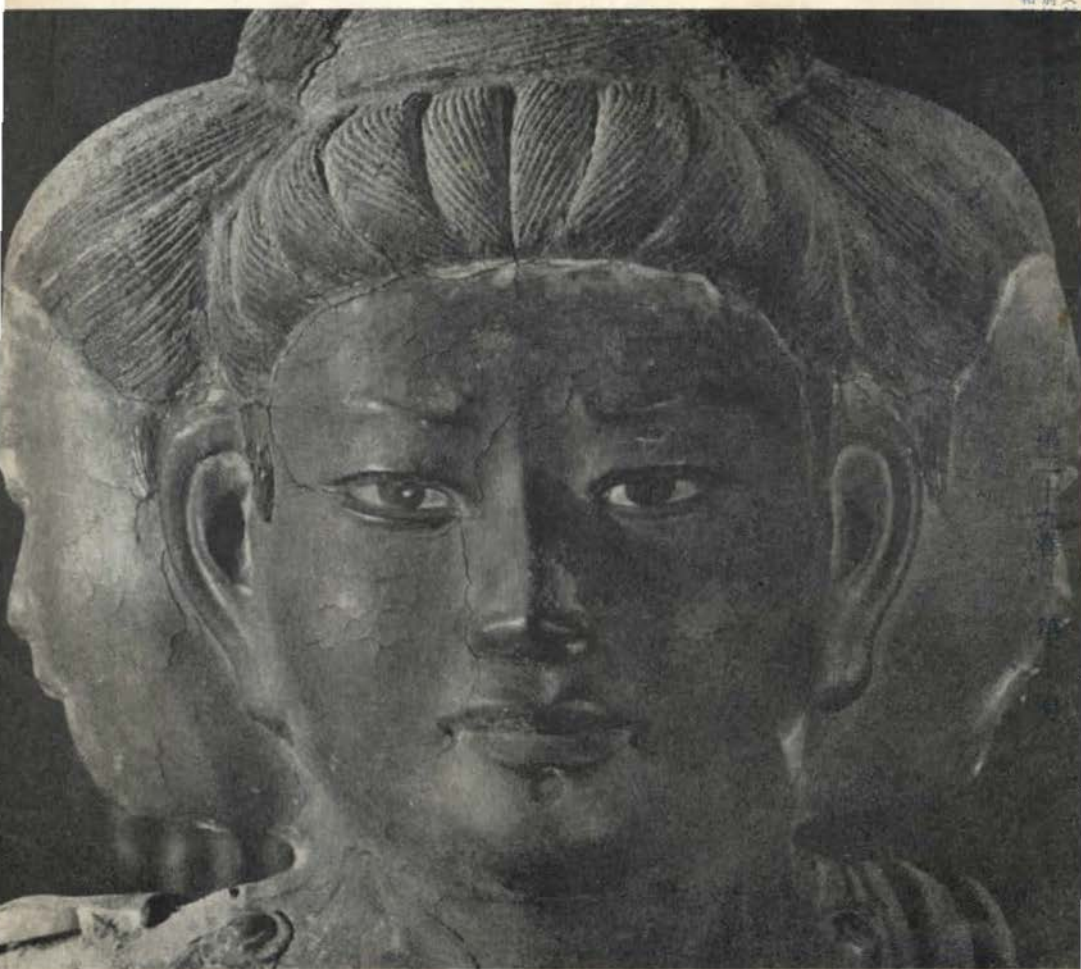


浄土

十月号

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別)
昭和二十八年九月二十五日 印刷 昭和



法然上人鑽仰会

—現代っ子の仏教観—

表紙の解説

国宝 阿修羅像

奈良 興福寺 蔵

いかりのにがまた青さ

四月の気層のいかりの底を

睡しはぎしりゆききする

おれはひとりの修羅なのだ

宮沢賢治は「春と修羅」という有名な詩集を出したが、その

中で賢治は「おれはひとりの修羅」だという自覚をもっている

ことに注目したい。もともと修羅はインドの神で次第に闘争を

好む悪神とされるに至つたが、一方仏教では法を護る役目にな

なっている。

しかし、人間が自分のうちにたむろする、みにくさ、きたな

さにどれだけ気づいていることであらうか。八咫の物に蓋をす

るVのような態度をとつていないであらうか。こう考えただけで

も、賢治がそういう人間であることを自覚し、「睡しはぎしり

ゆきき」している自分に情ない気持ちを抱きながら、（涅槃）

を求めさ迷つている、この姿こそ菩薩の精神と言えるであら

う。おのれにひそむみにくさを凝視する、そのひとみをたたえ

るこの阿修羅像はまさに「睡しはぎしりゆききする」姿といえ

よう。像の芸術的鑑賞はむしろ、そつとしておきたい。ただ、

この額を眺めつつ、おのれをふりかえり、阿修羅の自覚をもつ

（石上善応）

選擇集私解

大正大学教授 文博士 竹中信常 著

新書版
送料 一〇〇円

一〇〇円
三〇〇円

法然上人が現代においてになったら「選擇本願念仏集」をこのようにおときになるであろう 念仏信仰の真髄を明らかにした全浄土宗徒必読の書

目次

宗祖と共に
やすらげき旅路
念仏にすけささぬ
特急「こくらく」号
砂糖と塩
いつでもどこでも
ふり仰ぐ山の高さ
浄土への道
借金と念仏
サシミ念仏
一に一たす二
偏依法然
あとがき

発行人 法然上人鑽仰会
発行所 大道社

浄土

十月号



一仏は一切仏なり
法然上人御法語

— 目 次 —

表紙 国宝 阿修羅像

- ◇ 法 語内 野 熊 一 郎… (2)
- ◇ 現代つ子の仏教観安 居 総 子… (4)
- ◇ 私の体験寺 森 教 山… (12)
- ◇ ありのままの宗教(Ⅱ)——
奇蹟問答……洪 谷 賢 応… (8)
- ◇ 学会手引(2)——折伏の手 (15)
- 紀行文 パータリの木蔭にて(3)佐 藤 良 純… (20)
- 宗教界の話題高 橋 良 和… (24)
- 近 代 高僧伝—内田貞音大 橋 俊 雄… (18)
- 紹介 真野正順著「無量寿経講話」 (11)
- { 御法語をいただく (27) 浄土の動き (17) }
- 一枚起請文講話(Ⅲ)
信仰生活の目標村 瀬 秀 雄… (28)



法話

内野熊一郎

(文庫 東京教育大学教授)

もう五十年余りも前のこと。讃岐山脈の尾根が、小さい丘を起伏させている寒村の草道を踏みしだいて、私はよく隣村のお寺詣りに連れていかれた。その両親と歩いた間道の草むらには、やはり秋虫のすだく懐しい声が流れていた。峠を越えると、茶店で一ぱい一銭の甘酒を飲ませてくれる。私には、お寺詣りよりも、この一ぱいがありがたかったのかも知れない。今は、ジュースに置きかわっているが、やっぱり、この峠を来て、ずうっと見遙かす狭い高瀬

平野の眺めには、一ぱいのひなびた甘酒の甘ずっぱい麴こもの香が、びったりするように思えて、惜しい。何年かぶりで、両親と歩いた跡を辿ると、ふッと、

その頃幾たびか聴聞した法話のいくさりが、蘇がえって来る。

名は何といったか、善男か善女か。それらはもう記憶が薄れている。が、妙に、この法話のあら筋だけは、延々と今もって、脳裏に残っているのである。

——ある老母と娘と（しておく）は、仏道に帰信することの深い善女であったが、衰われにも、貧農で、その日の食物にも事欠いていた。それでも、仏道法話の催される毎に、参会して熱心に念仏し聴聞するのを楽しんだ。今度も、お釈迦さまが法話をたまわる、というのを聞いて、この善老母と善娘は、ぜひとも聴聞したい、と願った。ところが、悲しい



ことに、着る衣服としては、ぼろぼろの仕事着だけ。それも、もう一着しかなかった。老母と娘とは、いろいろ考えあぐんだ末に、老母がその古仕事着を着て、娘を裸身のまま桶に入れ、その桶を老母が背負って参会しよう、ということになった。もう法話は始まっていた。老母は恭しく三拝叩頭し、背負っていた桶を人混みをさけて、廊架の片端におき、「さア、静かに、ここで聴聞おし」と桶の中の娘にひそやかに言ってやった。「これでよかった」と安堵した老母は、ひたすら法話に帰入した。法話は愈々佳境に入って、善男善女の心裡に無量の慈雨を降らせた。聴衆はひしひしと集り、法苑は立錫の余地もない。感動は極まって、満堂ただ一つの大きな信仰の渦となった。その一瞬！「あれッ」という間に、参衆に押されて、老母の大切な桶が、ああ廊架から、真逆さまに転がり落ちてゆく。踏み壊された桶の木片が、散乱してゆく中に、あわれ善娘の裸身が参衆の目前に、今、投げ出されようとし、衆人ははたと目を伏せた。その瞬間、あっ！虚空に高く妙音が韻びき、サラサラと衣摺がして、錦地の法衣が舞い翻えり、善娘の裸身は掩い尽されて、神々し

い金色の背光がさし輝いていた。——と、いう筋だったように思う。

この法話が、仏典の何に原づくのか。折があれば、誰人かに伺ってみよう、と思いつながら、まだ果さずにいる。が、時々、或は事あるごとに、ふッ！と脳裡をかすめて、ある心境に導いてくれるこの法話を、自分ながら、「佳い話だなア」と考えて、「まづ自から真剣に念仏三昧に帰入する者は、仏は見棄てず、仏果を得させる」という意味に、不遜ながら解したりしている。すると、「天行健、自強不息」の意にも、通じて来るような気もする。五十余年前に聴聞した法話が、今日、知らず識らずのうちに、私の生活を支える筋金となっているとは、不思議なものである。それだけ、普遍的なものを仏道は具えているのであろう。こう考えていると、七、八才の小童に、この法話を聴聞させておいてくれた朴農の、今は亡い両親が、心の底から懐しく、好きで好きでたまらなくなる。この法話を通じて、両親は今もって私の中に生きている。そして、この法話の中で、今日も、私は両親と語り合っている。あの甘酒をすすった甘酸っぱい雰囲気の中で……

現代っ子の仏教観

安居 総子

(三鷹四中教諭)

一、

私の中学校の三年生が、修学旅行を前にして、何を学習してくるかをグループで話しあつてきめたテーマの一つにこんなのがあつた。奈良や京都には寺院が多いが、一体寺ではどんな生活をしているのだろうか。特にその生活基盤である経済はどうたてられているか。又一日の生活はどんな形で営まれているのか。できれば直接坊さんに聞いてみようというのである。つまり彼等は、寺というものが自分達の生活とかけ離れたものであるために、その生活の起床から就寝までの一部始終を知りたい気持がはたらいたこと、そしてその生活が何によって支えられているかを知らうとしたのであつた。更

に、京都、奈良には観光寺院が多いが、それらと他の普通寺院とを比べて、特に経済面で対比してみたのである。

日常かわす会話で、彼等は、寺を、「墓」「葬式」「遺骨」「魂」というようなつながりの中でとらえようとする。その主宰者たる僧侶は、一面では「葬儀を司る人」として、つまりお経をあげて収入を得る人としてとらえ、一面では修業をし、悟りを開いた人として、極端に言えばかすみを食って生きている仙人のようなかけはなれた人としてとらえる。いづれとするも何か世間離れのした世界に住む異邦人として見ているようである。彼等は、「何を食べるのですか。魚や肉も食べるのですか。」とか「朝はよほど早く起きておつとめ

するんでしょね。」とかきく。たまたま拝観料はなにがしかときけば、どのくらいの収入があり、税金はどうなってる、支出はどんなうちわけか、彼等には質問がありすぎる程あるのである。それらが一つの学習テーマとなったわけである。次の文は、こうした現代っ子の一人である中学生の仏教についての作文の一つである。

二

日本には、昔から多くの宗教がある。その中で、日本の政治や文化と切り離しては考えられないものに仏教がある。この仏教は昭和の時代になって、その衰えがひどいということをよく聞く。日本の古代、中世、近世の人々の精神のにない手であった仏教が、どうしてこんなに衰えてきたのであろうか。われわれは、いったいこの仏教をどう考えればよいのか。わたしは、衰えゆく仏教を、むりに保護したりする必要はないと思う。仏教は仏教の内の力で生まれかわるべきである。人々の支持や信仰を強いるのなら、そんな仏教はなくてもよい。

では、どうしてなくてもよいと考えたのか。その理由を、私は次のように考えている。

一、仏教の行事と生活

仏教の生活はわれわれの生活には入りこんでいない。キリ

スト教では、日曜の礼拝、復活祭などは、深く根をおろしている。だが、仏教の花まつりなどは、あっても西洋のように生活そのものにはなりきっていない行事である。このちがいにについて「キリスト教は、人生の三大行事に関係し、仏教は、一行事にしか関係しないといわれている」ことが思いあたる。

二、仏教の経典の無意味さ

仏教には、経本という物があっても、聖書のように、日常生活に結びついていない。それに漢字ばかりで、私も祖母の持っているのを見せてもらったことがあるが、ぜんぜん読めなかった。そこで、今までは、先人達が何度も経本を国語になおし、日常生活に合うように努力したらしい。しかし、いずれも失敗した。(毎日新聞の宗教欄に書いてあったこと)経本を書き直すだけではなく、新しく作る必要があるのではないかと思う。現代の仏教になるには、現代生活につながる内容が絶対に必要である。

三、祈る対象や目的

キリスト教を信じているほとんどの人が、食事の時や寝る前に祈る。子供までも祈っている。だが仏教は、年寄りや封建的な部落の人が祈っていても、若い人や子供は祈らない。それは、祈る意味が少ないからだ。キリスト教は、イエス・キリストを尊敬し、毎日の生活を感謝するために祈る。とこ

ろが、仏教は祈る場合、死んだ人や、宗派を開いた人に対してがほとんどで、生活そのものには縁がない。それに祈る場合は人が死んだ場合や命日などで、毎日の生活を感謝して祈る場合はほとんどない。

四、構造改革の必要

仏教界の内部は、古くて封建的だといわれている。それはキリスト教のように宗教改革がなかったからだと思う。そのため仏教界は、古くて封建的な空気が強く排他的である。たとえば、新しい宗教の創価学会などは、すべて合理化されていて現代的であるが、その反面、他の仏教を非難して、自分の宗教がいちばんいいのだと宣伝している。この傾向は多くの欠点をもっているが、活動的な宗教である点において、古い仏教を押しつけ、人をひきつける力を示している。古い宗教は、もはやこの傾向さえみられないのである。

五、経営の改革

寺は檀家の寄付だけでは経営が成り立たない状態である。しかも坊さんはなぜ成り立たないかを考えようとしてない。そして過去の幻影を追っているだけである。アルバイトをしてでも寺を成り立たせようとするよりはつぶした方がいいという意見もあるが、それはアルバイトだからいけないので、立派な副業としてなら必要である。経済的にも成り立って寺の

経営の方にもプラスするだろう。だから、早く副業をみつけてその収入で寺の経営をすればよい。こうなれば、信じる人は自分の寄付によるお金が少して、楽しく寺に来ることができて、仏教は再び盛んになるだろう。

三

この作文は、四国のある中学二年生の書いたものである。事実の認識に基づいて意見を述べた論説文で、二年生としてはかなり程度の高い作品である。この中学生が、日本の仏教の現実をどうとらえどう論断しているか。彼はいう。日本の仏教は、「昭和になってその衰えがひどく」、「古代、中世、近世の精神にない手であった」ものが、今ではそうではなくなっていると。具体的には、

一、仏教の行事がわれわれの生活に入りこんでいない。

二、経本にある内容が、生きたことばとしてわれわれに訴える力をもっていない。

三、生活の中に入っていないので祈りがない。祈る目的も対象も失われている。

と、われわれの生活から仏教が追放され、精神的支柱にはなっていないことをその現実としてとらえる。さらにこれを教団内部に目を移して、仏教界は何をしているのかと批判を向けるのである。

一、教団の不活発な活動

二、教団内部の勢力争い

三、寺院経営のしかたについて

と。注目すべき点は、創価学会の動きをとらえ、その活動を熟視し見習うべき点をさとしたときには、仏教も大いなる活動ができようと期待をもつてみていることである。

こうした現状把握を一つの論拠として、彼は、仏教界内部から生まれかわるべきだと説く。彼は、仏教を日本の偉大な文化遺産であるとし、これを捨てるべきでないと考えている。しかしそれすらも「人々の支持や信仰がうけられぬ仏教なら、仏教は無くてもよい」と極言するのである。

四

いわゆる現代っ子の中学生の、寺や仏教に対する考え方を、一論文を掲げながらみてきた。この論文がすべてではないとしても、ここに現代っ子の仏教批判があると考へねばなるまい。そして多くの子供達が、仏教の何たるやをぜんぜん知らないという現実だということである。ここで重要なことは、これを仏教人がどう受けとめるかということではないだろうか。戦後十八年、高度の経済成長を遂げて復興した、我が国が、その反省として「人間の回復」を大きく掲げ、「人づくり論」「道德教育の徹底」「高等教育課程に宗教の単位

を」と、教育政策が進められようとしている昨今である。その趨勢にあつて、仏教人が今までと同じような態度や教導であつてよいのかとささやかれるときに、一中学生の「人々の支持や信仰がないなら、仏教は必要なし」「仏教内部から立ち上るべきだ」という批判は、非常に恐ろしい響きを持つて迫ってくる。いくつか掲げた仏教や仏教界の現実把握は、かの中学生一人の目ではあるまい。彼を含めた現代に生きる青年たち、或は一般の目であるかもしれないのだ。そして、「仏教はいらない」ということは、現代っ子が、小市民的個人の幸福追求のために、他人をおしのけてまで生き抜かねばならぬ立場におかれて成長しつつある彼等が、あるいはそれを現実化しかねないということである。彼等は、近代科学の知識を得、日本の歴史や文化遺産を正しく知って、成長するに従い、現実を熟視しながら日本を築いていく大きな力なのである。その彼等にこたえ得る仏教でないかぎり、仏教も人々の生活の中に生きてゆくことはできないであらう。

何も知らぬ中学生の論文とたかをくくってはならない。仏教人が、何も知られていないという現実をもう一度じっくりみつめ、たかをくくべきはずの中学生の批判を謙虚に聞く耳を持つべきであり、真の反省の中から真の仏教が生れてくるべきものであることを、この論文は教えている。

ありのままの宗教 (Ⅱ)

奇蹟問答

渋谷賢応

諏訪仏教会副理事長

私の寺に創価学会の青年部の人々が、寺折伏に来た時の次第は前号に申し述べたが、私の寺を出て、寒気迫る厳冬の夜をおかして彼等は又バスにゆられながら、私の寺から更に二里の山奥の柏原の歓喜院、清水賢隆上人の所に折伏に出かけたのである。着いた時には九時をすでにまわっていた。清水上人はかねてよりこのことあるを予期しておられたので、ニコニコされながら彼等を玄関口に迎えられた。以下は私が聞き得たその時の模様である。

「私たちは創価学会の青年部の者です。先生にお話を受け給わりたいと思ってまいりました。」

「そうですか、この寒いのに大変ご苦労さまでした。それで話と言うのは。」

「浄土宗についてうかがいたいと思ひまして」

「そうですか、でもあなた方は私に聞きたいと思うことはあなた方の流儀で相当研究して来ているのでしょうか。もしそうなら何も今あらためて私から聞きただす必要もないでしょう。」

「それはまあそうですが、いや先生はよく話がわかる。心光寺ではひどい目に会った。どうぞこれをおさがり下さい。」

とピースをとり出す。

「いや私はタバコはあります。それに新生ですから。」

「そうですか、でももう十年もするとこの柏原部落もみんな日蓮正宗になりますよ。それでも先生は念仏をしているつもりですか。」

「この柏原が正宗になるかどうかは私には今は何んとも云えません。けれ

ども今は一軒ありません。正宗になった時のことは、私は私なりに考えがあります。あなた方には迷惑はかけませんから。」

「そうですか、でも浄土宗ではとんでもない邪教を仏教だと教えこんでいますね。」

「それはどう言うことですか。」

「そうじゃありませんか、中国の善導と言う人は、気が狂って寺の門前の柳の木で自殺をとげたそうですし、捨閉闍拋などと言って正法の法華經を誹謗しているし、第一、善導と法然が夢の中で会ったなどと言うことを信じて念仏しているなどと言うことはおよそ科学的な論拠のないことでしょう」

「あなた方は中々くわしいですね。それだけご存知ならもう私の言うことなどお聞きにならなくとも解っているでしょう。けれども、私は私なりに、そのことについても確信しているつもりです。」

「それをお聞きいたしましょう」

「善導大師のことは、あれは伝記の字句のまちがいであると聞いています。あなた方はどの伝記をもととして言っているのか知りませんが、一つその論拠となる伝記の名前を聞かしていただきます。」

「それは知りませんが、そう聞いています。」

「あなた方は論拠もたずに他人の言うことなら何でも信用なさるのですか。まあそれはよくお調べになることとして、次の捨閉闍拋ですが、浄土教では、どんな人でも、学問のある人でもない人でも、悪人でも善人でも、お念仏することによって救われるのです。他のお経をけなすつもりはないが、他のお経は、みんなあなた方のような学問のある人でなければ成仏できない。ところが、私たちのような凡夫は、お念仏よりお救いの道がないのです。捨てると言うのは、あるから捨てるのだが、それさえもてぬ人に、捨てるものさえない、だから、学問をして救われよう、修行をして救われようとする考えを捨てよと言っておられるので、お経や、教え、そのものを捨てよと申されておるではありません。」

「何だかよくわかりませんが、それでは夢の問題はどうですか、科学的な論拠のないバカバカしいことは。」

「昔の偉い方々には色々な奇蹟があるものです。しかもこれは、法然上人が、一生懸命に善導大師を思いつめられた結果のあらわれで少しも奇蹟ではありません。あり得ることです。そんなら、あなた方は、日蓮上人が竜ノ口で斬られそうになったときに、にわかにな雷が鳴り出して、振り上げた首切り役人のその刀に雷がおちて、刀が五つに折れてとびちって、日蓮上人を切る事が出来なかったと言う話をご存知で

すか。」

「知っています。あれは日蓮大聖人の竜ノ口の御法難です。」

「そしてそれはほんとうのことだと信じますか」

「信じます。ほんとうにあったことです。」

「そうですか、それなら今あなた方の一人が、あなた方のだれかの首を切ろうとして、刀をふり上げた所へ落雷したとしたら、その人たちは無事でしょうか。」

「それはわかりません。」

「そうでしょう私はおそらくこんどは即死だと思う。今の科学的な見方からすれば、刀だけが五つに折れて、二人とも死なないなどと言うことはとうてい考えられない。」

「日蓮大聖人のご伝記にうそはありません。」

「あなた方は日蓮上人のことならどんな奇蹟も奇蹟でもなく、まして嘘でもない。法然上人のことになると、夢を見たことさえ科学的でないと言う。それではあまり勝手がすぎはしませんか。」

このようにして、観喜院の清水賢隆師はこの奇蹟で、大分「宗論」をたたかわしたようである。

以上が寺折伏の様子であるが、この人たちは、彼等が信奉

する「折伏教典」をうのみにし、それを自分から思考することなく寺折伏の資料としてぶつつけたまでのことで、その範圍を一步も出ていない。

「善導」の項には「後遂に気が狂い、寺前の柳の木で自殺を遂げたのは有名な話である。」とあるし、「破折」の項には「しかるに念仏宗の開祖たちは捨開闢地と言って三部經以外の教えを一切雑修雜行となして正法たる法華經を誹謗している。」とあるのであって、知ったようなことを言っている。これ以上のことは何も知らないと思われる。

ただここで問題とすべきは、この奇蹟についての考え方である。彼等は法然上人の靈夢を奇蹟と言っているが、これには伝承を尊ぶ仏教界に於て、時代と地域を異にする善導大師からの伝承を、いかにすべきかとの後世宗学家の苦心の作との感がないでもない。伝法ではこの二祖対面は口伝とされている。しかしながら、「ひとえに善導に依る」としてしたわれた法然上人の、この御対面はむしろ当然すぎる程当然なことである。

むしろ日蓮上人の伝記の方が非科学性が満ち満ちている。慧星が安国論によって出現したり、亡くなった上人のお母さんを生きかえらせて四年間も長生きをさせたり、雨ごいをし

真野正順著

無量寿経講話

この書は、「無量寿経」全体の内容を解説するに先立って、第一講この経典をいかに読むか、という一章があり、ここに著者のこの経典に対する見方の特色が、明らかにされている。

この書の特質は、著者が自ら語っているように、在来の宗派の見方にも、また、過去の固定した見方にも、とらわれることなく、もう一度白紙にかえて、経の語るところを虚心坦懐にとらえてゆくこととする点にある。

具体的に、それはどういうことであるかという点、従来の「無量寿経」の見方は、「どうしたらわれわれは浄土に往生できるか」という浄土往生の一点にのみ中心をおいて、この経を見ている。浄土往生は、この経典の重要な事項には違いないが、しかし、この経典は浄土往生のみを説いているのではない。視点を「どうしたら浄土に往生できるか」という一事に限ったがために、仏の大なる救済の全体の姿が曖昧になり、それと同時に、ただ浄土往生のみを目的とする来世主義的な宗教のようになってしまった、という点を指摘している。

浄土教は、とかく来世主義的な宗教と呼ばれがちであるが、著者は逆に、現在をいかに生きるか、社会生活をいかに営むか、という現在の宗教生活のありかたの目測として経典を見なおしている。この見方が全篇を貫いている。

しかしながら著者は、従来の浄土往生に中心をおく見方を全く否定しきるというのではない。従来の見方を完成せしめんがために、あらためて経の全体を見なおそう、というのである。

こうした新しい見方は、実は、著者の該博な学識と、詳細な原典の検討にもとづくものである。しかし、この書を読むときに、そうした専門的な問題が読者

にとつてそれほど苦にならず、平易に読むことができるのは、著者が、経典に説かれていた問題を、自らの信仰上の問題として考え、自己の知性に納得のゆくように語っているからであらう。それと同時に、表現が入念で読み易いせいでもある。

近頃、ジャーナリズムで、物事を批判的にみながら現代人質を評して、「一億総評論家」という言葉がよく使われる。また何か社会的な事件が起ると、新聞紙上に学者が登場して事件を専門的立場から、心理学的に、あるいは社会学的に分析して説明しているのをしばしば見かける。現代人はそうしなければ納得しないからだ。浄土教も、今、このような場の中にあつて風当たりが強い。この書は、こうした時代に即応した現代人の納得のゆく「無量寿経」の講話である。

（渋谷区上通り一〇二三）
大法輪閣発行定価五三〇円

私の体験



山 教 森 寺
(吉水学園高校幹事)

わたくしは、この学校へまいりましてからもう五十年以上になりますので、昔のことは忘れてしまいましたが、十四才のときに、母親につれられて高岡のお祭を見にまいりました。それは五月一日のことでした。母の知合いの富山県小杉町不捨院を訪ねました。私の俗名はキヨと申しましたが、その時娘心に、五・六人の尼様たちが一緒に生活していられるのに感動して、私もあんな清らかな生活をしてみたいな、と思ったわけです。私の父は宇賀教範という真宗のお寺、大門の小泉養樂寺の次男坊で、後に浄土宗の僧になり、岐阜県神岡町中山の東林寺に住していましたが、私が十才のときになりました。そんなことで私も十四才で不捨院に入り、寺森海音尼の弟子となりました。剃髪の師匠は東林寺の武内大禅師であります。こう申すと、何ということもなく剃髪出家したようでございますが、私の一族が元来真宗で、高橋順次郎等もその一族の出身でしたので、真宗の立場から尼僧などになる必要はないと反対されたものでした。それでも、私は真宗坊主がきらいだったので不捨院に入り、皆さんと共に托鉢に

出たり、旅の修行にも出ました。

私の師匠はよくお念仏申す人でしたが、八十二才でなくなりました。いろいろな逸話がありますが、八〇才のときはじめて写真をとりに高岡の写真屋へ行きますと姿見にうつった自分の姿を見て、「あれまあ、もう写ったじゃないか」と申しますので、皆で大笑いいたしました。私が一番若かったのですが、若い者から、学校にやろうということで十五才のときに京都の浄土宗尼衆教場へまいりました。学校を卒業してから、しばらく不捨院にいましたが、故土川善激上人にすすめられて尼衆学校に奉職するようになり、今日までいつのまにか五十年以上の月日が流れました。

特に信仰上に深い影響を受けたと思いますのは、何と申しまでも尼衆学校幹事木原円隆先生の熱烈な信仰と厳肅な御日常でした。次に京都大学の生理学の教授をしていられた石川日出鶴丸先生が富山県の御出身でしたので、特に親しくして戴きました。先生は近來、稀に見る浄土宗の篤信者でした。先生については、どれだけ多くのものを学んだか知れませんが、先生はよくお念仏を申し乍ら草

取りをしてもらいました。ある日奥様がこんな話をして下さいました。今日はどうしておそかったのですかと訊ねますと、主人が申しますには、神楽坂にさしかかったら、恵心僧都の山越の阿弥陀様のように美しい仏さまを見たので、それを拝んでいておそくなったと申しますので、主人は少し気が変になったのではないかと思う程でしたが、主人が信仰に入りましてから、私も次第にいろいろ教えられておりますと。石川先生は、私にとつても、ただ人ではないと思います。そうそう、こんなこともありました。石川先生御夫妻と話をしていた時、先生が郷里の白石の阿弥陀様の御本尊さまの話をされました。この寺の住職竹村良山師が急病で死にそうになられたので村人がお金を出し合つて入院させるべく、和尚を戸板にのせてかつぎ出そうとしました。ところが、その和尚さんは、「待つてくれ、わしは死んでもいいから、そのお金で御本尊様の修理をしてやつてくれ」といつて村人を拝んだそうです。それで村人も「何を言うか」と言つて和尚さんをついで行つたそうですが、その後、どうなったか知りま

せんが、「その御本尊様のお体がこわれ、箔が落ちかけていたそうな」と言つて石川先生が泣き出されると、奥さんも私もクツクツと言つて泣いたことでした。信仰の世界というものには不思議なものです。若い生徒達の中にも、素直にそれを受取る子もいれば、理窟ばかり言つて、いつまでも、わからぬ子もいます。

この間の北陸の雪害の時等も、他所さまはその被害も甚大でしたが、私のお寺は大したこともなくてすみしましたので、「不思議な位や」と弟子が申しますので、「何が不思議なのか、仏様の御加護があつたんや」と申しましたら、弟子たちも涙を浮かべて「ほんまや」と申していました。それだけわかつてくれるだけでも、日頃お念仏申していってくれるからだと思います。

何しろお念仏を申していると腹がたたなくなります。それだけでも有難いことだと思えます。お念仏を申していると申しようてたまらぬようになります。はじめは忙しくてお念仏申すひまがないとか、お念仏申す間に何か他のことをしたらと思つたりしますが、つと

めて申していますと、次第に申さずにはいらぬようになり、後には申しとうてたまらぬようになるから不思議なものです。

京都に住んで五十年以上にもなりますので、浄土宗の高僧先徳や他宗の著名な方々や久松真一先生のような御立派な仏教者にお親しくしていただいて、どんなに教えられ、はげまされて来たか知れません。近年は原田龜太郎先生にはげまされて、お念仏に一寸喝が入つたように思います。原田先生は強い浄土の信仰を持っていられ、自ら還相廻向の菩薩であると信じていられる位の方ですから、先生の西方庵を訪ねますと、先生の御日常がよくわかります。今日は僧よりも俗の中にりっぱな仏教者がいられるように思います。「禪に久松抱石居士、浄土に原田竹翁居士」といつてよいかと思いますが、お二人とも行き方はちがいますが、その日常生活は還相的であつて、禪者と念仏者の現実生活のあり方を、在俗のまま示していられるように感じます。ある日、その原田先生の御来訪をうけ、いろいろと御教示をたまりましたが、私は出家の身としてはすかしく思い、深く反省しま

した。しかし、これが勝縁となって、今ではあの時の原田先生は私にとって仏さまであつたと思っています。たしかに私のお念仏に喝を入れて下さいました。それから言うもの、周囲の者が心配してくれませんが、毎朝三時におきてお念仏を相続しております。それが不思議に続くのですから、ありがたいことです。

学校の経営についても、いろいろ苦勞がございしますが、不思議に皆さまの思わぬ御援助を得て、今日まで尼僧の教育を続けて来ておりますこと、これも仏さまのお加護ではなくて何でございましょう。信仰がなかったならこの学校はとうの昔に消えてなくなつていでしょう。世間で何と非難されようと、この学校がより多くの方々によって支援されているという事実を見て頂きたいと思ひます。それが目に見えない信仰の力による支援であつて、仏法の不可思議さ、ありがたさを汲々と感ぜずにはいられません。

つまりぬお話を申し上げました。八十の老言とお聴き流し下さいませ。

南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏

（二〇頁よりつづく）

たり、先程の竜ノ口の御法難にはじまって蒙古襲来にいたるまで奇端の連続である。

ここで考えるべきことは、宗教には、奇蹟を尊ぶ性格のものと、静寂を尊ぶ性格のものとがあると言うことである。現世利益は奇蹟の宗教であり、還想の彼岸を求め、禪定に安心を求める宗教は静寂の宗教である。どちらを真とし偽とするかは観点によっても異なるし、どちらを現代的と考えるかと言うことも批判の角度によつてちがうだろう。

しかし私は思う。宗教は、すくなくとも仏教は、その本質として、奇蹟を排除して寂滅を求めるのが真実であり、現代にも即していると思ふのだが、彼等は専ら現証と称して奇蹟を以て折伏の拠点としていることは周知の通りである。ここに邪教性がひそみ、「悪貨は善貨を駆逐する」の法則があるのではあるまいか。

真善美の古今東西にわたる大法則をくつがえして、利善美とする価値判断も、この奇蹟なくしてはなり立たない理論である。

この際、ありのままの宗教を見きわめ、それが真実のあるべき宗教との相異を観察してわれわれの信心決定を再確認すべきであると思ふのである。

折 伏 の 手

折伏は学会活動の特色であり、すべてである。「折伏せぬ者は成仏できぬ」とあっては、信者は、自己の成仏の為に必死になつて折伏にはげむのは当然である。こうした信者の心理をたくみにつかみ、学会人を増加し、又その斗争心の中で学会の団結をはかろうとしてゐるのが、その指導者達である。折伏は、やがて、その成仏が約束されると共に、現実的には学会組織内において、自己の地位が向上するという二重の成果が得られるだけに、どの学会人も、こと折伏にかけては、あの手この手でやってくる。

一番普通なのは、理屈はぬきにして、兎も角入会しろと、しつこくやってくるものである。末端の信者などでは、それ程、日蓮正宗

の教義も知らない筈で、「まんだらを拝めば必ず幸福になれる」の一点張り、毎日のようにくるものである。時には、二人・三人と連れだって、やってくる。中に少し教義を知つたのが、教義的に折伏してくるが、他は殆んど宗教の押し売りである。こうなると、宗教の布教というよりは、押し売りとの問答と同じで、根負けした方が負けである。現にこうして根負けした人が入会した例も随分多い。宗教の強迫的押し売りは、人權の自由を犯すと考えられるのであるが、折伏する方の側になってみると、必死であるから、余程、こちらが、しっかりしていないと、強迫と根氣比べとに負けてしまうこととなる。

少し、教義を知った者は、「あなたの不幸

は邪教を信じているからだ」という事で、邪教論をひっさげてくる。彼等にしてみれば、日蓮正宗以外は、一切邪教なのであるから、どんなに、こちらが申しひらきをした所で、耳をかさない。こちらが、教義に弱いとなると、猶更それをよいことにして、攻撃してかかってくるから、その点われわれとしても、単に、相手の根氣に負けないというばかりでなしに、こちら、自己の信仰と、その内容には、自信を持って対抗できるように日頃から準備をしておかなければならない。

もちろん、学会人の他宗教に対する理解などは、せいぜい折伏教典にでている程度の知識に過ぎず、極めて枝葉末節を取りあげて攻撃してくるだけであるから恐れるに足りない。しかし、いかにも難しい仏教用語を用いながら、折伏しかけられてくると、つい相手の意氣にのまれて参ってしまうこともあるので、その点、留意せねばなるまい。

いま、その一例として、折伏經典の浄土宗の破折の項を掲げてみると次の様である。

浄土の三部經は方等部であり、四十余年

の説で權經方便の教である。後八年の法華經こそ實經であり、釈迦の出世の本懷であることは無量義經に「四十余年末顯真実」と、又方便品に、「正直捨方便、但說無上道」と。しかるに念仏宗の開祖たちは捨方便すけはんぽうと開捨かいすてといつて三部經以外の教を一切難修難行となして正法たる法華經を誹謗している。これは四十八願中の第十八願にいかなる罪人惡人でも阿彌陀を念すれば西方十萬億土へ往生することができる、但し五逆罪と誹謗正法の者を除く」という誓文に背くから、現在の念仏宗で往生できるわけがない。まして法華經譬喻品第三には、「この經を毀謗する者は無間地獄に墮つ」と説かれてゐる故に、「念仏は無間の法なり」と決定されるのである。

これを見てみると、いかにも最もな理論の様であるけれど、随分勝手な理屈であることが分る。彼等はよく「捨方便開捨」と言う難しい言葉を用いてやってくる。これなどを始めて聞く人は、びっくりして參つてしまうことがある。わざわざこんな難しい文句をつかつ

て議論してこなくてよかりそうなものであるが、これで如何にも物識り顔になり、この言葉で自己陶醉してゐるのであるから、こんなことで驚いてはいけない。

大体、一宗をたてるには、自分の宗が釈迦一代教説の中で如何なる位置にあるかをきめ、これによつて、自己の信仰の確立の規準としたもので、教相判釈きょうさうはんしやくというのがこれである。そして法然上人の場合は、捨聖帰淨すてせいけいじやうと言つて聖道門をすてて、淨土門を取り、三部經の教に基づいて、末代凡夫の爲には、專修念仏こそ最良の道として選ばれたものである。したがつて、釈迦一代の教説の中の法華經の教を誹謗されたものでも何でもないのである。それを誹謗したなどとするのは、学会人の勝手な解釈である。

又十八願で「正法を誹謗するものを除く」とある正法が、仏法であることは当然であつて、法然上人が、捨聖帰淨された事は、何も正法を誹謗したことでも何でもないのである。彼等学会人は、釈尊等は、最早や過去の人で取るに足らぬとして、その教を蕩飯もの扱いをし、日蓮の教えだけが、最高のもの

だといふのであるが、これこそ、正法を誹謗することはなほだしいもので、墮地獄の人々こそ彼等といったい程である。

各宗の開祖は、いずれも、釈迦一代教説の中である教を自己の信念に基づいて、これこそ最適のものを取りあげたもので、帰する所は、一つである。それを、日蓮の、然も、日蓮正宗の教えだけが正教で、他は一切邪教だとは、随分思ひあがつたことと言わねばならない。

兎も角、彼等の教義理解は、せいぜいこの程度なのであるが、何分にもそう教え込まれ、又そう信じ込んでゐるのであるから、仲々手におえない。今まで仏教のブの字も知らなかった人が、折伏によつて、この様な教義を教えられ、頭に叩き込まれてゐるのであるから、仕末におえない。気の毒なことである。

したがつて、こうした折伏に対しては、下手な議論をしては始まらない。知らぬ顔で聞いているのも一つの手である。しかし、もし自分にも教義の理解があるなら大いに反論することも必要である。

浄土の動き

燃えぬ大文字山

大文字と言え、京都の夏の宵を飾る風物で、お盆の送り火として、信仰厚い関西の人々には、切り離すことのできないものである。今年は特に各宗寺院も協力し、点火の午後八時を期して一斉に梵鐘をならし、街のネオンや外燈を消して、市民が黙禱し、精霊を改善することになっていた。

所が、十六日の当日夕刻より物凄しい雷雨となり、八時には雨はやんだが、肝心の薪がしめってしまった為、とうとう如意力嶽の大文字だけは日延べとなってしまう、左大文字、妙法寺の他の四山だけの送り火となり、つめかけた観光客がっかりさせていた。

それにしても、今だかつて、こうした事が無かっただけに、京都の人々は、何か災難があるのではないかとビクビク。関西人の信仰に繋がる大文字だけに、今年の異変は心配の種というわけ。

浄土宗の合同すむ

宗祖上人の七百五十年遠忌を期に合同した浄土宗は、内外の注目の的であるが、又信徒の人々にも大きな関心事である。その後、合同の実も次第にあらがり、各教区の統合も完了に近づきつつある。

とくに、小林内局では、若い新部長を入れて、再発足をした為、これからは、いろいろな面で活潑な動きがあることを期待されている。特に新興宗教の攻勢が盛んであるだけに、教学、教化には一段と力を入れてもらいたいものだとは、巷間の声である。

学人の海外往来

八月の二日、東京の私学会館で松本徳明、佐藤密雄両博士の歓迎会が盛大に行われた。松本博士はドイツのボン大学の招請で約三週間、講演や視察の旅行をして帰国されたもの。又佐藤博士は夫人同伴でヨーロッパ旅行をし、現地の事情を

つぶさに視察してこれたもの。いずれもその経験がこれから生かされる事に多大の期待が持たれている。

この月から四月にかけては、京都の塚本善隆、牧田諦亮両博士が、東南アジア仏教視察され、又水野隆樹華頂短大大学長もインド訪問をされたばかりで、このところ浄土学人の海外往来は、盛んである。世界は日一日と狭くなりつつある時だけに、浄土人もこころで一大飛躍をせねばなるまい。若い人々の雄飛も、そう遠いことではないであらう。

教師の卵、汗だく修行

この所、東京の増上寺、京都の知恩院と、酷暑の最中に教師養成講座が開かれ、東京では四十人、京都では九十人程が、夫々三週間づつ、汗だくの聴講と、修行をつづけている。加行と殆んど変りがなく、一切外出禁止で猛修行。大学を出たか、在学の学生が多いだけに、この講座は仲々真けんである。

近代高僧伝

内田貞音

大橋俊雄

うちつつく飢饉に農民一揆や打ちこわしが全国的に広まりつつあった頃、徳子は天保十一年十一月、江戸日本橋の油町に内田甚吉の長女として生れたが、母親がまだ産所にいた生れて間もないころ、近火のため家を焼かれ、居所を求めて母の里である両国に移り、ここで祖父母のあたたかい慈愛につつまれ、何不自由とない楽しい日々を送った。一時的にのがれた飯の住居であったはずの両国での生活も、初孫だということは何くれとなく面倒をみてもらっているうちに何時しか十一歳まで、ここで暮すことになってしまった。そして秋には徳川將軍家の奥に、部屋子とし

て仕えることになったけれども、何故かほ

どの意味もなしに、出家をあこがれ、機会が

あったら尼になりたいと願っていた。そして

浅草観音に祈誓をこらすことも一再ではな

く、その日の早やからんことを願っていても

容易にその機会とてなく、十六歳の冬には父

がなくなり、時に七人の子供たちをかかえて

いた母は、奉公人をかかえ手広く家業をい

なっていた関係もあって、親類縁者たちと相

談の上、娘も十六歳になっていたのだから

迎え、家業をつがせたいと考えていた。母親

の病気を口実に家からの連絡で御殿から閑を

もらって帰って来てみれば、実は徳子に對す

る縁談。今ここで聲をめとるとすれば、生涯

出家をとげることはできない。何とか出家し

たい、尼となりたい、そのためには此の良縁

を固辞しなければということで、家業は妹つ

ねにゆずり、出家を許してほしいという切

なる望みをうちあげ、それが許されな

ひそかに家を出、あちこちにさまよいかくれ

ること五年。二十一歳の冬になり、それほど

出家したければということ、ついに母の方

のことである。

福田行誠を師と仰いで受戒し剃髪して名を貞音と改め、玉姫町の蓮華院で修行をつむこと数年。出家さえできれば好きな学問も存分にできるであろうし、尊い講義も聞くことができるのだろ

うと思つて、学徳一世に高い行誠を師としたはずであったがそれとて出家の身となつてみればはかない願ひにしかすぎず、尼などに学問はいらぬという考へで、仏書の披見すら許されないと有様。このままでは到底日頃の望みをとげることもできなければ、出家の意図にも反することになるので、深川の高橋辺に地所を求めて十方庵という自庵を設け、ここから通つて行誠の講義を聴聞することにした。一寺をかまえていると、寺の勤めにおかれて学問することすらできない。無權の寺を設けたのは、その意味で学問に精進するための方便であつたけれども、いざ聴聞してみれば、仏学は何とむずかしいことか。初歩的なものを身につけていない悲哀をまざまざと味わうばかりであつた。

その頃知恩院の境内に宗学校が設立されたことを聞いた貞音は、とるものもとあえず

喜びにいきみ、自庵の整理をして上落し、半年ほどおくられて入学した法妹聞声と共に机をならべて学ぶこと三年に及んだ。尼なるがゆえに学問することすら許されなかった当時、師行誠のはからいで勉学することができると聞いた貞音の喜びは如何ばかりであろか。尼として入学を許されなければ、男僧としてでもよいから許されたい。尼僧だということとで区別されてはこまるというけなげな態度は、勉学の上で人後におちることを嫌い、夜を日について懸命に努力した。そして明治十四年六月には鹿兒島布教のために、徹底とともに下薩し、鹿兒島松原町に尼寺を建て、



興して、三十八年九月中興号を賜わった時の喜びは何ものにもたとえることのできないような喜びかたであったという。長年の苦悩が実をむすぶまでの努力は容易なことでは実現はされない。復興成就の日、信徒の御尽力のおかげであると、はらはらと落涙したのも故なしとはしない。しかし貞音のなされた仕事はこればかりではなく、法妹聞声とともに力をつくされたのは尼衆学校設立であった。「鹿兒島の化導は命のごとくつとめたのだから、いつまでも人情にひかれて月日を送るよりも、尼僧さんたちの教育につくした方がよいのではないか。世の中はだんだんと進み、尼僧もこれまで通りだと世界の文運におく

れ、将来とりかえしのつかない結果にさえなるかも知れない。尼僧をそだてる道を真剣に考えなくてはなるまい」という師行誠のすすめで、それは尼のかねがね考えていたことでもあり、早速鹿兒島から引きあげて、開校の準備にとりかかり、明治二十年三月知恩院山内の入信院を教場として発足した。これというのも前年の九月行誠が知恩院門主に晋山したという好縁があったからに外ならない。その時の喜びを貞音は、

色かえぬ学びの窓の呉竹は

一ふし高きものにぞありける
とよまれている。

かくて東奔西走尼僧教育の場を設け、また数多の寺々の復興に心がけられた貞音も、病には抗するすべもなく、大正七年四月十七日お指をさされ、御来迎のあった由をお教えになった尼は、常日頃から用意しておかれた麻の衣を召され、合掌して眼るが如く浄土に旅たれた。時に世寿七十九、法名を常蓮社教督上人住阿真音尼老和尚という。



パータリの 木蔭にて

〈イン ド の あ
の 町 こ の 村〉

— 3 —

佐藤良純

(大正大学講師)

釈尊が今日のネパール南部に誕生され、その教えが仏教として広められたのは、西暦前五、四世紀の事です。釈尊はガンジス河の両域にまたがって強盛を誇っていたいくつかの国々を歩かれ、教えを広められましたが、その頃のパータリプトラは未だ大きな都市ではなかった様です。釈尊の伝記のうち、入滅前後のことを伝えた經典には次の様なことが記されています。

釈尊は、パータリ村のウバソクの供養を受けられた。その時、マガダの大臣スニード

とヴァツサカーラは、ヴァツジ族の侵入を防ぐためにパータリ村に城を築きつつあった。

そして釈尊はそれを見てこの町の将来について、

有力なる天神が宅地を構うる地方には、有力なる王と、王の大臣との心は、そこに住居を築くに傾く、……阿難よ、聖者の居所たる限り、商人の集る限り、このパータリプッタ城は首都なり。物資の集散地たるべし、されどパータリプッタ城には三つの

危険あるべし、即ち火により、或は水により、或は友の不和によるものなり。と云われます。ここに出てくるヴァツサカーラと云う大臣は、釈尊が以前に、王舎城で会っていられる記録があり、釈尊は大臣たちに送られてガンジス河を渡られる所がすぐあとに出ています。

今日、沙門羅雲の出でむ門を羅雲門と名づくべし、彼の恒河を渡らむ渡場を羅雲渡場と為すべしと。ここに世尊の出で給える門を羅雲門と名づけぬ。

以上の記述から判断すると、王舎城に首都をもっていたマガダ国は、北方ヴァイシャリのヴァツジ族に対抗する意味からも、水陸の要衝であるバトリプトラに進出して来たことが判り、すでに商業を中心として町が栄えていたことも明らかです。城の三つの危難のうち、火をあげているのは先にも述べた様に、この町に木の防壁があったことを示し、水の恐れも二大河の合流点にあった町として当然で、城としての長所と短所は同時に存在していたわけです。この町があまり大きくなかったことは、釈尊臨終の際に周囲のものが、偉大なる方がなぜこんなへんびなクシナガラでなくなられるのかと歎き、大きな都城の例として、チャンパー、ラージギリ（王舎城）、シュラバステイ（舍衛城）、サーケータ、コーサンビ、バーナーラシーをあげ、バトリプトラの名が見えないことから判ります。釈尊が河を渡られた場所について玄奘は、仏足石の伝説を伝え、釈尊が入滅の地クシナガラへ立たれる時、河岸の巨石をふんで、マガダ国を望め、今、私は入滅するが百才の後に、阿育王と云うものが出て仏法を興す、と



云われたと記しています。ゴータマ・ガートの名は長く知られていた様ですが今日ではこの名はなく、マハービール・ガート（ジャイナ教の開祖マハービーラに関するものかも知れませんが）、や、マヘンドラ・ガート（アシヨカ王の王子と同名）などが大きな渡し場になっています。

初期仏教經典にはこの他、ベナレス在住の

バラモンが尊者ウデーナに帰依して建立したゴータムキー講堂や、有名なククタアラーマ（雞園寺）のことが出ていますが、王舎城の竹林精舎、舍衛城の祇園精舎の様に大がかりな仏教のセンターの遺跡は文献のみで、この町では発見されていません。

一九一三年にバトナ市の南郊を発掘したスプリーナー博士は、みごとにみがかれた円柱を数十本もつ大ホールを発見していますが、五世紀に法顕の見たアシヨカの塔、七世紀に玄奘の見たアシヨカの石柱は見当らず、一九五五年のアールテカール博士の発掘でも、最古の寺院跡や寺印は、シュンガ王朝（前二世紀）までしか遡りません。この附近は現在クムラハールと呼ばれ、これがアシヨカ王の王子、クマラ・マヘンドラのために建てられたクマラビハラの転化ではないかと云われていますが、大ガランを誇った雞園寺すら、玄奘の時に「類聚して己に久しけれども基址は尚存せりと云う有様でしたし、有名なモヘンジョ

ダロ遺跡の例などから判る様に、古い町の上に新しい町を築くことが多いので、現在のパトナ市がすっぽりこれら遺跡の上をおおっているのかも知れません。

バータリブトラの町が仏教に関係してクロースアップされて来るのは、マウルヤ王朝のアシヨカ王の時代からです。アシヨカ王が、仏教に深く帰依する様になったことについては、色々な物語が伝えられています。この王が他の宗教宗派にくらべて仏教に大きな保護を与えていたことは確かです。又この王は、全インドにまたがる帝国をきずいたと云うので、その面からも現代インドはたいへん誇りにしています。

アシヨカ王を神通力をもつ王にまで神聖化している仏典には、多くの神々が、日々、次の様なものをささげたと云っています。一つには無熱池からくんでくる十六荷の冷水、これには雪山中に生えるナーガラターと云う齒磨き用の柔く光沢あり香氣ある木の枝、三つにはマンゴーなど薬用の果実、その他色々があがっています。

面白いことにこれらの品は今日のインドで

も必要品のものなのです。暑い乾いた日の多い所で、冷たい水はいつでも要求され、人々は素焼きのツボに水を入れて風通しのよい所におきます。こうすると素焼きの目からしみ出る水が蒸発して熱を奪い冷たい水が得られます。

次に西洋風のインド人を除いて、人々は朝の齒磨きに香りある木の小枝を用います。朝、町の市場へ行ってみまると、二十センチほどに切りそろえた小枝の、これはハッカ、これはニームと木の種類によって分けられた「ハブラシ」が三角形に積まれ、人々は自分のこのみの香を求めて行きます。

このハブラシは一人一回の使用に限りますから最も衛生的です。マンゴーは果物の王者と云われるほどで、少々クセはありますが風味はたいへんによいものです。

さてアシヨカ王の事蹟として第一に知られるのは王が釈尊ゆかりの地などに記念の石柱をたて、各地の石

にも法勅をきざませたことで、今日でもなお小片が発見されたりしています。

八万四千の塔を建立したことも著名なことの一つです。釈尊の滅後、舍利は八分されて八地方の塔に収められていましたが、アシヨカ王はこれを開いてあらたに全インドに塔を建て舍利をまつたと伝えられています。玄奘は大きな塔をみるとすべて「これ無憂王の建つる所なり」と記していますが、王の詔勅をきざんだ石柱、大石は、ほとんど全インドに見られますので、かなり多くの塔も実際に



マトウラ出土

仏坐像

建立された事と思われます。初期の塔はあまり大きなものではなく、レンガでつまれており、これが后代に上から上へと増補されて、サルナートや、サーンチーの大塔の様なものなのでしょう。

王は、王子マヘンドラのセイロンへの布教を始め、諸地方への伝通使の派遣も行ったと伝えられています。

更に、一切善見律注序によると、第三回の仏典結集が、王の時代バータリプトラで行われたことが記されています。

アシヨカ王は即位後三年間はバラモン教を



ベナレス、ヒンドウ大学

(立てるは筆者)

信じ、父のビンドウウサーラ王が行って来たバラモン教系の僧侶に日々の食事を供養することを続けていましたが、或日その人々が勝手に坐って食事をしているのを見て不信の念を抱く様になります。たまたま仏教の沙弥を見て心を打たれ、種々問答の末、深く仏教に帰依する様になり、バータリプタに阿育園寺、金インドに八万四千の精舎を建て、バラモン教系の僧侶にかわって仏教の比丘たちに日々の食事を供養する様になります。王子マヘンドラ、王女サンガミッタも出家し、三カ年をかけて阿育大精舎を完成します。所が

布施を断たれた異教徒は、形だけは出家して仏教団に入り、特権を利用し、しかも釈尊の遺法を守らず、火を拝む者、極端な苦行をする者など、勝手なふるまいをする者が多く出て来ます。ために本當の比丘達は彼等と共に

居ることを心よしとせず、阿育園寺の布薩は数年間行われないと云う事態になります。アシヨカ王はこの混乱を終息させるためモッガリアブタイッサを元首として会合を開き異見を除いて正しい教えを確認したと云うのです。ただこの第三結集の記録は、北方所伝の仏典には出て来ません。玄奘も、八万四千の塔の建立、マヘンドラの出家（ここでは王の弟となっていますが）、阿育園寺（玄奘は難陀寺をアシヨカ建立としています）がこの二つの寺の關係はまだよく判っていません）の建立については詳しく述べています。が、仏典結集については記しておらず、法顕に至っては難陀寺建立の記事も出していません。しかし仏典結集には経済的にも後援者が必要であったことでしよう。第一回の王舎城、第二回のヴァイシャリといずれも当時の大都市で行われたことも意味があり、アシヨカ王の下で、大都市バータリプトラでこれが行われたことは、事実と云ってよいと思います。

マウルヤ王朝以後もバータリプトラは、多くの王朝の首都であった様です。

宗教界の話題

- ・ガラス張りの新おおい堂
- ・共産圏の初の仏舎利塔
- ・立正佼成会も政治意識を高める
- ・小規模神社の対策

高橋良和

(中外日報社)

ガラス張りの新おおい堂

藤原三代の栄華をつたえるみちのくの中尊寺は、戦後時代の脚光をうけて観光客も多く、まさに観光ブームであるが、その金色堂を永久保存するための修理が行われ、いよいよ八月からその金色堂を解体して東京におくり、本格的な修理をほどこした上で、もとの姿に

して保存するということである。

それについてこの修理の委員会は再三現地の中尊寺で開かれていたが、完成後の金色堂の保存については、現在の鞘堂（鎌倉時代）を上の方に移して、鞘堂だけで保存し、新しい金色堂には新おおい堂を建設して永久保存にすべきを期すことになったのである。

ところでこの新おおい堂であるが、これは

ガラス張りというまことに珍らしいものであって、日本にはじめてのケースである。考えてみるとガラス張りの箱に入れて丁度応接室にでも置く人形を想像してもらえばわかるのであって、しかもこのガラス張りの新おおい堂は、鉄筋で支え、広さ約二百八十平方メートル、尾根の高さ十一メートル、床高九十センチとかなり金色堂より余裕をもたせてあるが、その保存のために床に通風をよくするために空間をつくり、換気装置を充分考えるところである。

そこでこの金色堂の拝観者は、ガラス張りのこの新おおい堂を通してお堂を拝むというかつこうになるが、その昔の「五月雨の降り残してや光堂」のおもかげとははるかに消えたような感じがなくてもないが、昭和の今日では永久保存のためにはやむを得ない処置ということであきらめるより方法があるまい。

金色堂の修理は五億円新おおい堂の建築は二千九百万円といわれているから、修理面積から考えてみても、法隆寺の金堂の解体修理につづく昭和の大修理の一つとして後世に残るものとみていい。

八百年ぶりの金色堂の解体を藤原三代のミイラはどう考えていることであろうか、夏草やつわものどもが夢のあとである。昭和金色堂の修理はいよいよ秋から本格的となつてゆく。

共産圏の初の仏舎利塔

宗教団体としては珍らしい平和運動を展開している日本山妙法寺は、白衣の上に南方の僧侶と同じ黄色のケサをかけて、うちわ大鼓を叩いて歩く姿はときどき目につくことと思うが、この日本山妙法寺の山主が藤井日達氏である。

インドに出かけて藤井氏の名を聞くものなら如何にその存在が大きいかを知ることが出来るが、その藤井氏がモスクワに仏舎利塔を建てようという悲願がつよく実を結ぶことになったのである。

しかも正式にモスクワ市長との間に契約が取り交わされ、しかもソ連仏教会長のハンボーラマ・ガンボーエフ氏に仏舎利を渡したというから待たれるのはその実現の日ということになる。

藤井日達氏は去る五月に中国仏教協会の仲介でソ連に赴き、モスクワ市長のN・ドワイガイ氏に仏舎利を贈って約束したということである。そこでこの仏舎利塔は、明年七月開かれる第二回の世界宗教平和協議会までに完成をみる予定であるといわれている。

仏舎利塔というのは釈尊の骨を安置する塔ということ、日本ではすでに九カ所建てられている外、インドにも出来ているが、今度のように共産圏の国、ソ連では全くはじめてのことである。

それだけにこの塔のもつ意味も重大であり、このソ連の仏舎利塔が世界平和運動の契点になればその建設のねがいもまた一入というべきである。

仏の教えなど不毛の国であるソ連であるだけに、話が半分になつても日本の信徒にとっては目を皿ようにしておどろくことと思えるが、法に国境なく、宗教にへだてないことからすると、仏舎利塔のモスクワ入りにはお釈迦さまも御満足であろうと思うのである。

立正佼成会も政治意識を高める

創価学会に公明政治連盟が作られているが、今度は立正佼成会（会長庭野日敬氏）でも政治意識を高めようという動きがみられている。

それは昨年末に会員の政治への関心を深める目的で、佼成懇話会なるものが結成せられたのを機会に、更にその組織を充実させるために、東京都議会議員を中心として、佼成都議会議員懇話会を結成し更に統一選挙が終ったのを機会に、地方の議員の協議会結成の動きがみられるようになってきているのである。

そこで立正佼成会関係の議員の数となると、衆参両院の議員で一一二名ほどあり、更に東京都はじめ地方府県会議員は三百九名もあるところから、佼成会議員の大同団結ははからうということになったもの。

こうした動きを前にすでに東京都議会議員協議会、新潟県々会議員協議会などが結成、つづいて、横浜や、都内の世田ヶ谷区あたりでも団体が組織されることになっているから、やがて全国的な下部組織がつくられるということになっている。

こうした各地で盛りあがっている議員協議

会の意向としては、単に倭成会議員の横の連絡ということだけでなしに、政治に大いに仏教精神を底辺とした、倭成教學を織り込もうというのがそのねらいであるとみていいのではないだろうか。

倭成会の信者としての深い信仰とその教學知識を高めるために東京にこれらの議員を集めての研修会も計画されているということであるから、今後の倭成会選出の議員に一本筋金を入れようということである。

とも角も、東京都の杉並に大きな聖堂の完成を間近にひかえた倭成会に、この議員団の倭成懇話会は一つの新風をおくることになるようである。

小規模神社の対策

一口に社寺というけれど、この神社と寺院の数は十五万あるとみていい。これを二つに割ってみると、寺院の数は七万、神社の方は八万ということになる。ところがこの八万の神社のことであるが、その神社をあずかる神官の方は何人ぐらいかという約一万六千というから、凡そ神主なる方々は一人で五人の

お宮さんの神事をひきうけている率になる。大きいお宮さんで名を知られているのならいざ知らず、鳥居があっても、小さな祠のようなお宮もかなりあるから、これらはみんな兼務であるらしくその数も一万六千社が本務の神官、あとの六万四千は兼務神官というのが神社庁の調査である。

そこで神社庁では、これらの兼務神官の神社についての対策をたてて小規模神社の振興策を発表したのである。小規模神社とはすなわち六万四千の神社のことで、その対策としては、本務社の方は、神官が奉仕しているからいいようなものの兼務の神社は凡そ、その所在地の氏子總代が全權を握っているところが多いため、祭祀や、教化力、それに維持経営のためにも神社の発展向上を阻止している向が非常に多いというのである。

そこでこれらの問題解決のカギとしては、その神官の給与、奉仕、運営対策をどう整備するかが問題点であって、まず予算案の作成によって宗教法人としての必要な書類と帳簿の整備、財産目録の作成など、凡そ宗教法人法による神社としての適正な運営をはかった

上で、神官の給与のことを考え、兼務社の向上発展の資料としようというのがその趣旨である。それに先立って、関東の都七県の調査の結果が出来あがっているのので、それを中心として、神社の立て直しに力を入れるということである。名付けて小規模神社向上対策はどこまで成果をあげるか、神社庁最近のヒットの一つであると思われる。

「浄土」特集号のお知らせ

〔十一月号〕

現代仏教批判

〔十二月号〕

阿弥陀信仰論争

御法語をいただくハトビラの御法語

一仏は一切仏なり。あらゆる知見、解行、証悟、果位、大悲等同じにして、少の差別なし。この故に一仏の制するところは、即ち一切仏同じく制したまふ。(選択本願念仏集)

阿弥陀さまの本願を信じて、口に南無阿弥陀仏と唱えれば、必ず極楽に往生できます何故ならば阿弥陀さまは、お念仏を唱える者なら例え愚痴の多い凡夫であっても、必ず摂取して浄土に往生させるとお誓いになつてゐるからであります。なるほど南無阿弥陀仏と名号を唱えれば、阿弥陀さまは救つて下さいますが、数多い仏さまの中には、我れ関せずといつて外方を向いたり白眼視したりする仏さまがはいはしないかという気持ちになります。つまり仏さまによつては、阿弥陀さまのお誓いに難くせをつけて、それは虚妄だ、そんな事はできるわけがないと説く仏さまがはいはしないでしょうか。

法然上人はこのように阿弥陀さまのお誓いを否定する仏さまが、いかに多くあつたにしても自分は少しも畏れないと申されました。何故畏れないのでしょうか。阿弥陀さまの説だけを信用して、他の諸仏の説を信用しないからでしょうか。又は阿弥陀さまが特に勝れた仏さまですから、他の仏さまの説を聞く必要がないのでしょうか。上人の畏れない理由はこうしたことではありません。例えば観音さまは慈悲において勝れてゐるとか、勢至さまは知慧において勝れてゐるとか申しますが、それは観音さまも勢至さまも菩薩だから多少の区別があつて比較され得るのです。しかし仏さまは互に比較され差別されるものではありません。仏さまはどの仏さまも同じように、真理を探究し、それぞれの理論をたて、そしてこれを實踐され、その結果としては悟りを開いて仏さまの位につかれたのです。従つてどの仏さまも衆生の苦しみを救ふとする大悲の心を同じようにもっています。つまり仏さまの慈悲と知慧とは、

どの仏さまについて申しても欠けるところのない完全なものであります。このように仏さまは絶対価値のお方ですから、比較するとか差別をつけるとかいうことができないのであります。

ある仏さまの言行は、そのまま他の仏さまの言行であつて、寸分の相違がありません。だから仏さま同士で反対するとか否定するとかのことがあり得ないのであります。これが即ち、一仏は一切仏であり、一切仏は一仏であるということであります。更に法然上人は具体的な例証として、阿弥陀經の所説をあげています。同經には一日もしくは七日、一心に阿弥陀仏の名号を称念すれば、決定往生することができると説かれてあります。しかも時はまさに惡世であつて、饑饉あり疫癘あり兵災あつて、邪見が流行して善道を修する者がありません。こうした時代にあつて念仏をすめたことに對し十方の數多くの仏さまたちが讃嘆しています。これ即ち、一仏の教化をそのまゝ一切仏がその証明したものであります。

一枚起請文講話 (三)

信仰生活の目標

村 瀬 秀 雄

(天正大学幹事)

ただ往生極楽のためには南無阿彌陀仏と申して、

疑ひなく往生するぞと思ひとりて、

申す外には別の仔細候はず。

一、往生は生活目標

仏教の哲理は、奥深く難解なものであるから、これを理解し蘊奥を極めることは実に容易なことではありません。それだけにまた修行の方法にもいろいろのものがあって、修行といえは少なからざる忍耐と努力とが要るものとされています。

しかし法然上人の信仰は、学問を積み重ねて、その結果漸く悟りに近づくというものでなく、かえって学問を捨てられました。また修行についても、肉体的困苦を克服するというものでなく、老若男女誰れでもが直ちに実行できるものという所に特色があります。このように法然上人の仏教は精神的に肉体的に恵まれた一部のものの占有物であってはならぬというので、この点が実はそれまでにあった仏教の根本をゆるがすものでした。

仏教の学問、修行にはそれぞれ到達すべき目標のあることは当然で、例えば即身成仏とか解脱とかいうのがそれです。一部には病気を治したり金儲けができることを目的とするものさもある仕末です。

それなら法然上人の信仰の目標、更にいえば人生の目的はどこにあったかというのに、「ただ往生極楽の爲には」とある通り、往生極楽がそれでありました。しかし単に往生極楽を

目標とすることだけであれば、それは以前からあった信仰でもあり、そのために念仏を申す人も多かったのです。法然上人の人生観が他と違う所は、すべての人は凡人にすぎなく且つ罪深い者であるとの自覚があるかどうかという点にあります。世はまさに末世であって、人はすべて凡人であり、そしてすべての人が救われる道を求めに求めて、遂に念仏による往生極楽という目標を得られたことが、信仰の基礎となっています。

よく聞く言葉に、仏教とは悟りを開いて仏になることだといふのがありますが、往生は成仏とは違うことであります。

「成仏はかたしといえども、往生は得やすし。道徳、善導の心によれば、仏の願力を強縁として、乱想の凡夫、浄土に往生す」(顕真法印との問答)

この乱想の凡夫という点が問題なので、果してこの世に乱想の凡夫でない者がいるでしょうか。誰もがこうした凡夫であるとするれば、凡夫が念仏を唱えて浄土に往生できるのは、阿弥陀さまの本願の力があるからこそであります。このことこそ生死を離れる要諦であるとされました。しかもこれこそ凡夫がなし得る唯一の道であります。

法然上人は、生活に困らず妻子に囲まれて安穩に暮らす幸福な人々について、苦勞がないだけに大切な生涯を無為に過し

はしないかと憂えています。春は花、秋は月と生活を楽しんでいる人にも同じく人生の一大事があるのです。平常を安易に送っている人が、もし死に直面したとしたら、その焦躁、煩悶こそこの世の地獄であります。

「妻子眷属は、家にあれどもとなはず。七珍万宝は、蔵にみでれども益もなし。ただ身にしたがふものは、後悔のみだ也。つゝに閻魔の庁にいたりぬれば、つみの浅深をさだめ、業の軽重をかんがへらる。法王罪人にとひていはく、なんぢ仏法流布の世にむまれて、なんぞ修行せずして、いたづらにかへりきたるやと。その時にはわれらいかがこたへむとする。すみやかに出要をもとめて、むなく帰る事なかれ」

(登山状)

出要とは生死を離れる要諦であります。明日の日を待つことなく、今の一刻すら猶余がなりません。まして学問が完成するまで待つとか、一通りの修行が終るまで待つとかの問題でない筈です。この世を苦と感じたなら、その時直ちに苦から脱がれられなくては役に立ちません。ここに法然上人が生活の目的、信仰の目標を往生極楽という点においた意味があるのであります。

二、往生極楽の意味

往生極楽が生涯の目標である以上は、往生極楽の意味する所を一応考えねばなりません。

往生とは往いて生れると書かれている通りの意味ですが、往いて生れるという以上は、こちらからあちらに往くということになります。こちらとは現実生活のことで、恩愛憎悪の渦の中にもまれながら苦惱迷妄にあけくれしている生活のこととあります。あちらとは真実の世界のことで、苦海といわれる日常生活から脱れ、苦楽を超えた永遠の世界のこととあります。従って往生とは生れかわることであり、真に生きることであります。

そして普通に往生という場合には、三通りの意味に使われています。その第一は、生死のとりわれから離れ、ほんとうに生きる身になることで、つまり成仏のことを意味します。しかしこれは乱想の凡夫のなし得ないものであることをすでに述べました。また第二は阿弥陀さまの本願の力によって、念仏するものがほんとうの世界にこのままの身で生きることの意味します。例えば観經に説かれている韋提華夫人がこれに当り、これまた通常の人にできないことであります。最後の第三は、阿弥陀さまの本願の力によって、お念仏を申す者が臨終の時に必ず仏さまの来迎にあずかることを意味します。つまり念仏を申すものがこの世を去って蓮華台上に生れ

ることです。

さて往生極楽ということは、極楽に往いて生れることであります。それなら極楽の意味するところを知らなくてはなりません。經典には極楽のことを西方十万億の仏土を過ぎた所にある、現に阿彌陀さまが說法されていると説かれています。また極楽にあるのはすべてのことが満足され、楽のみあって苦がないといわれています。極楽はこのような所であるということですが、何故それでよいのかについてもう少し考えてみなくてはなりません。

極楽は超三界の世界だといわれています。超三界ということは、欲望の世界、有限の世界、そして理念の世界のいずれにも超えた世界ということです。これは現実を超えた世界であり、真善美の世界であります。つまり永遠なる真実の世界であります。また極楽は無量光であり無量寿である世界で、絶対無限の世界だといわれます。こうなれば阿彌陀さまが無量光、無量寿の仏さまですから、極楽は阿彌陀さまのことを意味するといえましょう。



更にまた極楽は地獄に対する言葉です。極楽のことを考えるのにその裏には地獄という考えがあることは当然のことになります。そこである人は、地獄は地下奥深い所にある暗闇世界をつくり、極楽は西方はるか遠くにある光明世界をつくっていると信じて、います。またある人は、地獄も極楽も決して遠い所にあるのではなく、

実は自分たちの胸の中にあるのだと信じ、ある人は、地獄極楽という言葉は道德的方便に過ぎないと信じています。このように極楽のことを自分の好みに応じて様々に解釈し、かつ信じているわけですが、極楽が超三界の世界である以上、実在するとかしないとかの問題になり得ないのであります。それなら極楽は単なる観念的存在にすぎぬかといえれば、そうでもありません。極楽というのも地獄というの、信仰の上の言葉ですから、説明されて判るものでなく、その人によっていろいろと表現されるのが当然であります。

これに関連して来世のあるなしがよく問題になります。しかし来世は誰も体験し得ないものですから、科学的研究の議

論対象になり得ません。しかし現実には生きているということの喜びや感謝は、自分が死ぬということを考えずしては生れてこないものであります。判らないながらも自分の死について考えることによって有限世界が体得され、今生きている意義を知る門口が開かれてくるのであります。

信仰心のない人に向って信仰を説いても無駄なことです。高慢が身についた人に対して凡人たるの反省をすすめても仕方がないのと同じであります。更に申せば、阿弥陀さまの本願を信じない人に念仏をすすめても駄目です。このことについて法然上人のお詞があります。

「念仏の行を信ぜぬ人にあひて論じ、又あらぬ行の人々にむかひて執論候べからず。あながちに別解異学の人を見て、あなづりそしめる事候まじ。いよいよ重罪の人となさん事不便に候」(鎌倉の二位禅尼へ進ずる御返事)

ここに強く論争してはならぬといわれたのは、念仏を信じない人と信ずる人との間には人間的相違があるのだという意味が含まれています。即ち考えること感ずること行うことすべてが違ふ世界の人であるということに注意せねばなりません。しかし念仏を信じない人を見て、徒らに誘ってはならぬといわれる点を有難くいただくなくてはなりません。

三、摂取の益は平時から

極楽が西方十万億仏土を過ぎたところにあると經典に説かれているのは、計り得ない程に離れた所、ほとんど無限に近い程遠い所という意味であります。それと同時に計器で測るような距離ではないということをいい現しています。だからこそこれだけの距離があっても、念仏を申せば一瞬の間に仏さまがこられてしまいます。

「本願を信じて念仏申さば、一念須臾のあいだに、阿弥陀ほとけの来迎にあづかるべき也」(念仏往生要義抄)

この世と極楽との間には距離感がありません。念仏を申し極楽に往くことができたとしても、それだけでよいというものではありません。極楽は自分独りが往く所ではありません。極楽に往ったならば、再びこの世にかえって多くの人々を教化することが極楽に往く楽しみの一つになっています。法然上人ははっきりこう申しています。

「上品をねがふ事は、わが身のためにはあらず。かのくにむまれをはりて、かへりてとく衆生を化せんがためなり」とにかく念仏を申して臨終の来迎を願うのでありますが、臨終がいつ来るのか誰にも判りません。若くして一生を終る人もあるし、長寿を保つ人もあります。身体が健康であるか

らというだけで安心しているわけにゆきません。

「たとひ七八十のよはひを期すとも、おもへば夢のごとし。いはんや老少不定なれば、いつをかぎりとおもふべからず。さらに後を期する心あるべからず。ただ一すじに念仏すべし」(十二箇条問答)

法然上人は更に適切なお詞を以て、日常に油断のならぬ心掛が必要であると申しています。

「人の命は食事の時、むせて死する事も有なり。南無阿弥仏とかみて、南無阿弥陀仏とのみ入べきなり」(勸修御伝)

ある人が法然上人にこう質問しました。

「撰取の益をかうふる事は、平生か、臨終かいかむ」

撰取とは仏さまのお慈悲、如来の光明の中におさめとられることです。益とは段々に増してゆくことですが、ここでは効用といった意味です。ですから念仏を申して仏さまの撰取をいただけるのは、臨終まで待たねばならぬのか、それとも平生でもあり得るのかということであります。この質問に対して直ちに平生の時なりと答えられました。即ち

「平生の時なり。そのゆへは、往生の心まことにて、わが身をうたがふ事なくて、来迎をまつ人は、これ三心具足の念仏申す人なり。この三心具足しぬれば、かならず極楽にむまるといふ事は觀經の説なり。かかる心さしある人を、阿弥陀

仏は八万四千の光明をはなちててらし給ふ也。平生の時てらしはじめて、最後まで捨給はぬなり。かるが故に不捨の誓約と申す也」(念仏往生要義問答)

平生といい臨終というのも単に比較的問題にすぎぬということであります。法然上人は日常の一刻々々に臨終の思いをして念仏を申されたのであります。これとは反対に、臨終の時どころでなく、今直ちに仏さまから見放されることがあります。それというのは憍慢の心を起した場合です。無智のものの罪深いものも仏さまは救って下さいますが、もし人が憍慢の心を起したとすると、その瞬間に仏さまから見放されます自分が念仏を唱えるのだ、自分の行が勝れているのだと思うのが憍慢の心ですが、法然上人はこれを極度に嫌われました。

「もし憍慢の心だにもおこりなば、たちどころに阿弥陀はとけの願にはそむきぬるものなれば、弥陀も諸仏も護念し給はずなりぬれば、惡魔のためにもなやまさるる也」(念仏行者訓条)

弥陀も諸仏も見放してしまうというお詞はこの上にない強い言葉であると同時に、憍慢の心が起った瞬間に惡魔のものとなるのであります。このことは本願を信じて念仏すれば即刻仏さまの来迎にあずかることに對比されるものであります。

(以下次号)

日本一の生産・設備

梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響物理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展 参事 香取正彦先生
芸術院賞受賞



鋳物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分(梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 04 8847番 本社工場 高岡市横田

編集後記

▽世界の宗教界にもいろいろの大きな動きがあります。とくに、南ベトナムの問題などは、だまつてはいられないものの一つです。浄土でも考えてみたいと思つています。

▽本号では、やはり現代の問題として、「現代つ子の仏教観」をとりあげてもらいました。十一月号予定の現代仏教批判特集につながるべく、今日の課題の一つです。

▽内野、藤吉、高橋、寺森とめずらしい方々の玉稿で飾っていただいた事を感謝します。

▽宮林を中心に、安居、佐藤(行)・水谷・佐藤(成)と少し馬力をかけ始めました。十一月(現代仏教批判)十二月(アミダ経論争)を特集いたします。読者各位のご協力をお願いいたします。

「浄土」講読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一カ年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 十月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便認可

昭和三十三年九月廿五日 印刷

昭和三十三年十月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都千代田区板町一ノ二

発行所 法然上人讃仰会

電話東京三三二局五九四番

振替東京八二八七番

定価金五拾円(六円)

浄土

第二十九卷

第十号

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和三十三年九月二十五日印刷 昭和三十三年十月一日発行